

96-J-3

ドイツにおける近代都市史・都市化史研究について

馬場 哲
東京大学経済学部

1996年2月

このディスカッション・ペーパーは、内部での討論に資するための未定稿の段階にある論文草稿である。著者の承諾なしに引用・複写することは差し控えられる。

1. はじめに

本稿は、ドイツにおける近代都市史 (moderne Stadtgeschichte) ・都市化史 (Urbanisierungsgeschichte) の諸問題を考察することを課題とする。ドイツ本国でもこの分野の研究はここ20年ほどの間に急速な発展を示しているが、わが国における研究も、藤田幸一郎、北住炯一両氏の著作をはじめとして近年増えつつあり、研究動向も藤田氏によって簡潔に紹介されている。⁽¹⁾しかし、際立って学際的な性格をもち、近現代社会の諸問題を考える上で多くの示唆を与える、この分野の研究はまだ不十分であり、ドイツにおける研究動向の摂取も十分とは言いがたい。そこで本稿では、ドイツの学界動向に出来るだけ密着して、「近代都市史・都市化史」という、歴史学のなかでは比較的新しい研究分野の成立・発展の過程を概観するとともに、これまでこの分野においてどのようなテーマがどのような観点から取り上げられ、また今後どのような課題と可能性をもっているかを展望することにしたい。その場合、現在のドイツにおける近代都市史・都市化史全般の代表的研究者と目されるJ.ロイレッケ (Jürgen Reulecke) とH.マツェラート (Horst Matzerath) の研究に主として依拠することにする。むろん、他の研究者による重要な研究も出来る限り利用するように努め、筆者未見のものであっても重要と思われる研究には注で言及するようにした。

(1) 藤田幸一郎[1988]; 北住炯一[1990]; 藤田幸一郎[1991]。日本における個別論文の検討は別の機会に譲ることにしたい。

2. 「都市」と「都市化」の概念

そこでまず問題となるのが、「都市」や「都市化」とは何か、ということであるが、実はこれが面倒な問題を抱えている。とりわけ「都市」を定義することは極めて困難であり、都市に関する専門的研究においても、この課題の途方もなさが強調されたり、定義が最初から放棄されたりすることが多い。⁽²⁾ロイレッケは「それを少しでも変える展望」はなく、「この歴史において無限に多様で多面的な現象への時期的・部門的接近だけが常に可能であるように見える

にすぎない」と悲観的である。また、L. ニートハンマーも「都市」の定義としては、それを人口、人口密度、機能、統治形態といった基準で規定する方向がまず考えられるが、その場合には分類や境界設定が恣意的になってしまう傾向があり、他方都市を「農村的生活 ländliches Leben」や「地方性 Provinzialität」と対比された「都市的生活 städtisches Leben」や「都市性 Urbanität」といった「主観的知覚」によって定義する方向も、「都市的なもの」が社会全体に浸透するにつれて意味を失いつつある、と考えている。

もちろん、こうした閉塞状態を脱却しようとする試みがないわけではない。ニートハンマーは、様々なタイプの都市やそこでの生活に共通するパラメーターとして、人口、雇用、住居、インフラストラクチャーといった構造のレベルの密度、並びに経験や行為のレベルなどを含む多元的な意味での「密度 die Dichte」が重要であると指摘する。そしてその上で「都市的なもの das Urbane は、本質的に空間的な社会の集合状態であり、空間的なものの意義は、技術的条件や経済状態によって画定され、階級の固定化や期待の境界突破 Entgrenzung によって記述される時代に頂点に達した」と総括している。またロイレッケも、都市化史研究は今後理論的な基礎固めが必要であるが、その場合都市は分離可能なものとしてではなく、集合状態として捉えられるべきであるとして、ニートハンマーの先の総括を引用している。⁽³⁾ このように、都市の捉え方はその多面性・多様性を包摂できるようなものへと変化しつつあるが、ロイレッケも認めているようにまだ萌芽的段階にすぎない。したがって、われわれも「都市」概念の一義的な定義はさしあたり断念せざるをえない。

次に、「都市化」概念に移る。トイテベルクは、この言葉も多面的かつ多義的で共通項を見出すことは難しく、広く受け入れられている定義はないと述べているが、他方この言葉を説明する最も重要な観点として、(1)農村から都市への人口移動とそれと同時に進展する全般的人口増加、(2)農業から工業・サービス業への経済的重心の移動、(3)新しい社会構造の形成と空間的・社会的流動性の強化、(4)社会全体への都市的メンタリティーの拡散、の4つを挙げている。⁽⁴⁾ 固有の「都市」に関わることはばかりでなく、農村を含む社会全体あるいはメンタリティーや生活スタイルに関わるものが含まれており、その限りで、「都市」概念の多義性と同様の問題が存在することが分かる。こうしたなかで、ロイレッケやニートハンマーは、同じ都市化という場合にも、Verstädterung と Urbanisierung (以下、それぞれVとUと略す。) を区別して用いている。すなわち、前者は19世紀以降の工業化という新たな社会経済的構造転換に伴う都市への人口集中と「開放市民都市」への質的転換を意味し、後者は都市化が社会全体の社会文化的制度に作用することによって、都市性 (Urbanität) がもは

や都市とだけ結びつかない支配的な「近代的」生活スタイルになることを意味する。したがって、Vは都市と農村の対立をさしあたり強化するが、Uは長期的にはこの対立を解消することになる。⁽⁵⁾ トイテベルクはVとUをロイレッケほど明確には使い分けていないが、都市化は人口学的側面だけでは説明できず、都市的な生活スタイルの形成という文化的側面をも考慮すべきであり、「結局のところ都市化は、すべての社会的行為、規範、制度の総体である」とロイレッケとはほぼ同じ認識に達している。⁽⁶⁾ したがって、両者を区別することは十分意味のあることであり、以下では、VとUはいずれも都市化と訳すが、必要があれば区別することにする。

なお、ロイレッケは、都市史と都市化史との関係についても留意している。ロイレッケによれば、「都市史は、個々の都市及び一群の都市、あるいは都市制度を、それぞれの歴史的にはっきりした特徴において研究する」のに対して、都市化史は「ひとつの対象を取り扱うというよりも、社会全体の発展を鳥瞰することへの道を開く」ものであり、「歴史的実在を、特定の局面のもとでわれわれに伝えられた全体性のなかで知覚する」。もちろん、両者は密接に関わっており、ロイレッケの表現に従えば、両者は「同じメダルの両面」の関係にあり、しかも互いに上位-下位関係に立つものでもない。⁽⁷⁾

(2) 都市概念が既に19世紀から一義的なものでなかったことは、プロイセンの統計が1910/1925年に至るまで都市と農村を法的に区別しているのに対して、帝国統計が1867/1871年以来人口2,000人以上のゲマインデをすべて都市と見なしていることから分かる(H. Matzerath[1985], S. 23)。

(3) L. Niethammer[1986], S. 113-4, 127-9; J. Reulecke[1982], S. 15; [1993a], S. 66. ここで「空間」とは、地理的空間だけでなく、経験空間、情報伝達・社会化空間、行動空間、アイデンティティー空間、扶養・経済空間などを含む包括的なものと理解されている。

(4) H.-J. Teuteberg[1983], S. 2-3, 31-2.

(5) J. Reulecke[1977], S. 269-71; [1985], S. 10-11; [1993a], S. 56-7; L. Niethammer[1986], S. 129-30, Anm. 3. さらに、ロイレッケは、中心地が移住者を吸引し人口の増大を引き起こすが、城壁に囲まれた「旧都市」の質を変えることはない現象を「都市成長 Städtewachstum」と規定し、「開放市民都市」への質的転換を伴う Verstädtierungと区別している。なお、J. Reulecke[1977]は、ドイツにおける Verstädtierung 過程の社会経済的前提条件と帰結を多面的に論じたものである。

(6) H.-J. Teuteberg[1983], S. 30-1.

(7) J. Reulecke[1989a], S. 36; [1993a], S. 55. ロイレッケは、都市史と都市化史のこうした関係は、女性史とジェンダー史、メディア史とコミュニケーション史、若者史とジェネレーション史についても妥当するとしている。なお、都市史と都市化史とのこうした関係が前近代の都市にも適用できるかどうかについては、ロイレッケは慎重である。後に見る前近代都市と近代都市との連続と断絶という問題との関連で留意に値する。

3. ドイツにおける近代都市史・都市化史研究の成立と発展

ドイツ（さしあたり旧西ドイツ）において近代都市史・都市化史が本格的な発展を開始したのは、1960年代末～1970年代のことであった。⁽⁸⁾言うまでもなく、ドイツにおける都市史研究は19世紀初頭以来の分厚い伝統をもっており、特に1820年代と1890年代に研究の高揚を示した。しかし、その対象は主として中・近世都市であった。また、ワイマール期には地方自治思想・制度の研究や W. Christaller[1933] による「中心地理論」の提唱などの新たな展開が見られたものの、ナチス期に入ると、ナチズムの反都市主義や農本主義のために、近代都市史研究は足踏みを余儀なくされた。⁽⁹⁾

ロイレッケは近代都市史・都市化史研究の発展を、戦後のドイツ歴史学の大きな流れと関わらせつつ、3つの局面に分けて考えている。⁽¹⁰⁾第1局面は1950年代～60年代初頭に至る時期である。この時期には戦前からの「歴史主義」に立脚する狭義の政治史や理念史を中心とする伝統史学が依然として支配的であった。もちろん、その枠内で W. コンツェの「構造史 *Strukturgeschichte*」のような新しい動きも生まれつつあった。すなわちコンツェは、対象としては、個々の人間や行為よりも個人を越えた状態や過程、あるいは個々の現象よりも集合的な現象に目を向け、方法的にも数量的・類型的・比較史的手法の導入や体系的社会科学との協力によって伝統史学を乗り越えようとしたのである。近代都市史はこうした新たな方法に適合的な研究対象であった。⁽¹¹⁾実際、「西ドイツにおける都市社会史のプロトタイプ」とも言うべき W. ケルマンによる19世紀のバルメン都市社会史研究の序文で、コンツェは以下のようなことを述べている。すなわち、社会史とは「歴史的形成物の内的構造の叙述」のことであるが、都市史研究はこの目的にとって特にやりがいがある。「というのは、ある都市の「歴史的形成物」はわれわれにとって比較的通じの効く単位だからである」。「工業成長の時代の各都市のモノグラフィーの魅力は、常に新しく性格の異なる一回性のなかでの一般的典型の歴史的具體化にある」。⁽¹²⁾

ケルマンの著作以外の1950年代後半～60年代前半の近代都市史・都市化史研

究における重要な貢献としては、G. イプセンによる都市史の発展の理論的・類型学的考察、W. プレポールによるルール地域の都市化のメンタルな帰結に関する研究、地方自治研究の伝統を受け継ぎつつ、旧来の理念史的・制度史的枠組みを突破しようとしたH. クローンやW. ホフマンの仕事などを挙げることができる。⁽¹³⁾ また、この時期には研究組織や雑誌の発刊といった制度的基礎が形成されはじめ、1962年に『自治体学雑誌 Archiv für Kommunalwissenschaften』が発刊された。その創刊号で、H. ヘルツフェルトは、19～20世紀の都市自治体史研究が重要かつ有望な領域であるにもかかわらず、自治体学のなかで歴史的研究、とりわけ理念史・制度史に比して社会史・経済史研究が遅れていることを指摘して、「この魅力的なテーマの『緑の芝生』がこれまで非常に頑強に無視されてきたことに驚かざるをえない」と述べている。⁽¹⁴⁾ 事実この雑誌は近代都市史研究の発展に寄与する可能性を秘めるものであったが、ケルマンらの業績がなお例外的だったのと同様に、この雑誌に掲載された論文も現実の自治体政治に関するものが多かった。⁽¹⁵⁾ さらに、F. レーリヒ、H. プラーニッツ、E. エネン、E. マシュケ、H. シュトゥープといった代表的都市史家が依然として中・近世の都市史研究に従事した。このため、「緑の芝生」はなおしばらくの間殆ど手つかずの状態が続いた。第二次大戦直後より、近代都市や都市化は社会学、地理学などによって学際的な関心を集めてきたものの、歴史学にとってはなお周辺の研究対象にとどまったのである。⁽¹⁶⁾

第2局面は、以上の動きと時期的には一部重なる形で、1960年代初頭の「フィッシャー論争」を転機として始まった。周知の通り、この論争は第一次大戦の勃発にドイツがどの程度責任を負っていたかをめぐって、基本的には伝統史学の枠内で行なわれたものであるが、それをきっかけとして新しい世代の歴史家は、第二帝政期の社会的・政治的支配の深層にあるもの、あるいは経済的近代化と社会政治的近代化の非同時性の帰結に取り組むようになり、1960年代後半～70年代における「歴史的社会科学」ないし「社会史」台頭への道が開かれた。しかし、こうしたドイツ歴史学のいわばパラダイム転換に近代都市史・都市化史研究はうまく乗ることができず、低迷を続けることを余儀なくされた。新しい潮流は理論やモデルへの志向性を強くもっていたために、個別都市史の研究は後退を強いられたからである。⁽¹⁷⁾

ところが、1970年代に入ると近代都市史・都市化史研究はにわかに活気を帯びるようになり、現在に至る第3局面が始まることになった。その指標としては、以下のような出来事を挙げることができる。⁽¹⁸⁾ (1) 1970年にケルンで開かれたドイツ歴史家会議に際して都市史のセクションが設けられ、19世紀の地方自治がテーマとなったこと。⁽¹⁹⁾ (2) 同年10月にベルリンの「ドイツ都市学研究

所 Deutsches Institut für Urbanistik」からC.エンゲリを編集者とする『近代都市史情報 Informationen zur modernen Stadtgeschichte』が発刊され、これ以後19～20世紀の都市の歴史という意味での「近代都市史」が歴史学におけるひとつの領域として地歩を固めたこと（なお、同研究所は1974年より『自治体学雑誌』の編集をも自治体学協会から引き継いだ）、(3)同じく1970年にミュンスター大学のH.シュトゥープによって「比較都市史研究所 das Institut für vergleichende Städtegeschichte」が設立されたこと：この研究所は元来中・近世都市研究のセンターであったが、次第に民俗学者、地理学者、近代都市史研究者を包摂し、1974年に「工業化時代の都市制度の諸問題」というテーマのコロキウムを開催した、(4)1974年に「都市史、都市社会学、史跡保護雑誌 Zeitschrift für Stadtgeschichte, Stadtsoziologie und Denkmalpflege」（78年に『昔の都市 Die alte Stadt』に改称）が発刊されたこと。

こうした組織的基礎の拡大を背景として、1970年代以降個々の都市史あるいは様々な都市制度の研究が多数現われることになった。ヘルツフェルトが1975年にエンゲリと共同執筆したサーヴェイ論文の末尾には、「今日中・近世都市と並んで”近代”都市が歴史家の関心を集めていることを、全体として確認できる」と述べられており、近代都市史をめぐる環境がこの時期変化しつつあったことが伺われる。⁽²⁰⁾ もっとも、この時期の研究は、歴史発展の長期的傾向や社会全体のレベルで作用するメカニズムを究明することを重視する「歴史的社会科学」ないし「社会構造史」の枠組みのなかで取り扱われることが多く、その限りで、それはなお第2局面の大枠のなかでの変化にとどまっていた。実際、1970年代に若い世代の歴史家によって多く取り上げられた都市史のテーマのひとつである都市自治の問題は、一般的な政治的發展を地方政治の権力構造や指導的人物と結びつけるという形で分析され、もうひとつの重要テーマである諸都市の経済的・人口学的状態の分析も、工業化、都市化あるいは国内人口移動といった一般的な過程の事例として検討されたのである。⁽²¹⁾

ところで、以上のような近代都市史・都市化史研究の活性化を刺激した学問的背景として指摘しておきたいのが、(1)諸外国の研究動向、(2)隣接学問分野、(3)第一次大戦前のドイツ都市史研究の方法的遺産、の3つである。⁽²²⁾ 以下若干敷衍しておこう。

(1)では、イギリスの社会史的都市史研究、フランスのアナール学派あるいはアメリカのコミュニティー社会学をまず指摘できるが、なかでも大きな影響力をもったのがアメリカの「新都市史 New Urban History」である。H.-J.トイテベルクは、S. Thernstrom/R. Sennett[1969] が刊行された1969年頃がドイツ近代都市史・都市化史研究のひとつの画期であったとさえ主張し、そのインパク

トを極めて重視している。彼によれば、この潮流の研究目標は、①物語的叙述に代わる数量的叙述、②社会学理論と歴史的データの結合、③都市化における重要な画期の探求、④都市及び都市制度の比較による伝統的な都市モノグラフィーの代替、⑤普通の人々の日常生活の都市史への利用、の5点に整理できる。⁽²³⁾ この潮流に対しては、社会経済的枠組みとの結びつきの弱さ、一面的に数量化された記述、分析枠組みの粗さといった非難が出されており、トイテベルクも数量化に馴染まない法的・政治的制度、文化的メンタリティーといった要因を放棄することは本末転倒であると述べているが⁽²⁴⁾、この「新都市史」がドイツにおける都市史研究に一定の影響を与えたことは否定できない。W.H. Schröder[1979], R.Tilly/T.Wellenreuther[1985], R.Tilly[1986]などは、「新都市史」から影響を受けた近代ドイツ都市史研究の代表例と言えよう。⁽²⁵⁾ また、近代都市史研究は国際比較も盛んであり、J.Reulecke[1989a]を所収している C.Engeli/H.Matzerath[1989]は、その代表的な成果ということができる。

次に(2)の隣接学問分野からの刺激であるが、これは都市という対象の多面的な性格に関わるものである。第二次大戦後都市は、地理学、都市計画、建築学、法学、人口学、社会学、民俗学等々の多様な学問分野から注目される研究対象となったが、歴史学では以上のような経緯から他の分野と比べて取り組みが遅れた。しかし、こうした隣接学問における都市研究の進展は近代都市史・都市化史研究の興隆にとって不可欠の前提となった。とりわけ、地理学の果たした役割は大きく、H.-J.Teuteberg[1983]は、その副題が「歴史的・地理学的諸局面」となっていることから明らかなように、歴史学と地理学の連携が目指されている。⁽²⁶⁾ こうして都市史・都市化史研究は、歴史学のなかでも最も学際的な性格が強い分野となったが、研究の進展とともに、都市建設や都市形態、あるいは都市における生活スタイル、文化、メンタリティー、コミュニケーションなどが研究テーマとして取り上げられるようになった。

最後に(3)の第一次大戦前のドイツ都市史研究の方法的遺産であるが、ここで問題となるのは、理論への志向性に乏しかった「新歴史学派」の方法が優勢だったなかで試みられた、M.ウェーバーやW.ゾンバルトらによる都市制度の理論的解明の試みである。とりわけ、ウェーバーは都市の発展過程を合理化、官僚制化、近代化といった概念と結びつけて捉えようとし、こうした理解の枠組みは、次節で見るように、現在の近代都市史・都市化史研究の枠組みにも大きな影響を及ぼしている。⁽²⁷⁾

1980年代に入ると、近代都市史・都市化史は一層の進展を示した。第1に、1970年代の研究の活性化を前提として、種々の共同研究の成果(E.Rausch[1983], [1984]; H.Matzerath[1984], H.-J.Teuteberg[1983][1986], M.Glettler/

H. Hausmann/G. Schramm[1985]; H. Stöob[1985]) やロイレッケ (J. Reulecke[1985]) とマツェラート (H. Matzerath[1985]) による包括的・概観的な研究, あるいは詳細な文献目録 (B. Schröder/H. Stöob[1986]) などが続々と公刊されたことが挙げられる。これは、近代都市史・都市化史研究が中間総括を可能とする段階に入ったことを意味する。第2に指摘できるのが、1970年代に入ってから「日常史」あるいは「下からの社会史」と呼ばれる新たな研究潮流がドイツ歴史学の内部で台頭したことの影響である。周知の通り、「日常史」は、構造や過程あるいは「政治の社会史」を重視する「歴史的社会科学」に対して、人々の体験、価値観、行動様式、あるいは政治・社会・経済の一般的な枠組みに対する彼らの関係に注目することによって歴史学に新風を送り込んだが、都市はそうした視点にとって格好の対象となったのである。そして、住居、家政、家族生活、余暇、さらに都市化に伴う社会的分離、様々な社会グループのメンタルな適応・分化過程あるいは社会的抗議の表現や社会的紛争の決着の形態などがテーマとなった。こうして「日常史」は、「日常」という概念の曖昧さに弱点をもちつつも、都市史研究に新たな視点を提供し、そのスペクトルを大きく広げることに貢献したのである。(28)

しかしここで注目したいのは、それにもかかわらず都市史・都市化史研究が個別性・特殊性の描写に埋没してしまったわけではないということである。そもそも、都市史・地域史研究は、19世紀以降のドイツ歴史学のなかであって、常に一般性と個別性の緊張関係を強く反映する分野であったと言えるが、1960年頃までは個別性が強調され、それ以後1970年代までは一般性が重視されたのに対して、近年は両者の緊張関係を、都市あるいは地域に即して研究する必要性が広く認識されるようになったのである。すなわち、近代都市史は、近代化や工業化といった歴史的転換のなかで生じたコンフリクト、負担、適応を、空間的に限定された具体的な「場」に即して研究する上で極めて有利な対象なのであり、その結果歴史学における周辺的狀態から脱出するとともに、歴史学全体の認識を深化・拡大することにも貢献しうる分野となったのである。(29) マツェラートは、1970～80年代の近代都市史研究が「全体として生産的かつ発展的」であったと総括している。(30)

近代都市史・都市化史研究の前進を刺激したもうひとつの要因は、学問外的な必要から生じた。ロイレッケは、この問題を、先にみた戦後ドイツ歴史学の展開と公衆 (Öffentlichkeit) との関係の変遷として整理している。(31) すなわち、第1局面では公衆は歴史学に歴史の批判的分析を求めなかったために、歴史家は戦前に敷かれた軌道の上を走るようになった。歴史学界内部の様相が大きく変化した第2局面でも、歴史学と公衆との関係は基本的に同じであり、

公衆は60年代末の学生運動に積極的に関わった世代をも含めて歴史学に殆ど何も求めようとせず、せいぜい「宮廷道化師」的な役割を期待したにすぎなかった。第3局面に入ると歴史学への関心はかなり高まったが、当初は、歴史は国家、団体、自治体の行動の正当化のための手段として位置づけられることが多く、歴史学と公衆との関係はなお幸福なものとは言いがたかった。ところが、都市史は地域史とともに「故郷史」として捉え直されることによって、歴史学と公衆との望ましい関係を模索する上で重要な役割を次第に果たすようになった。すなわち、「地元には歴史的な根があるという意識、「故郷」の価値への回帰、急速に変化する環境や技術に直面して、近隣の環境のなかに視角的・感覚的拠点を出来るだけ多く維持しようとする願望」が、都市自治体、市民運動、伝統的な歴史協会、あるいは若い世代のいわゆる歴史工房運動の様々な活動を動機づけることになったのである。例えば、いくつかの都市の行政当局や市議会、市民の歴史的欲求を満たすために、若い歴史家を一定期間雇用して、学問的に基礎づけられ、しかも市民にも理解できる都市史を編纂することを企画しており、それとともに「現地の歴史家 Historiker vor Orte」という新たな職業像が形成されることになった。⁽³²⁾彼らに求められた役割は集合的な記憶を歴史的コミュニケーションによって内側から活性化することであったが、それは地元の世界の特殊性や個性を認識するだけでなく、その相対性や限界をも同時に認識することを目指していた。こうした動きは、都市史、都市化史、地域史は「われわれの具体的な生活圏の歴史性と一般的な過程の推移・全面的な構造転換・事件との架け橋」であるという、「日常史」の台頭以後近代都市史・都市化史研究が歴史学のなかで重要性を高めた理由に対応するものである。実際ロイレッケは、日常史の貢献のひとつとして、それが「故郷の再獲得」を目指すことによって、個人の新たな社会的・空間的位置づけを志向したことを挙げている。したがって、こうした学問外的な要因の登場は、歴史学内部の変化とパラレルな関係にあったということができよう。

最後にこの点と関連して確認しておきたいのは、以上に見てきたような近代都市史・都市化史研究の興隆と展開は、「都市の危機」あるいは「脱都市化」という言葉に集約される、都市の発展に伴う諸問題の深刻化、あるいは都市への懐疑の高まりとも深く関わっているということである。都市からの人口流出、制御不能となった都市成長、都市域から周辺への都市的機能の移動といった都市レベルの問題だけでなく、経済危機、生態学的危機、失業の増大とそれに伴う将来への不安といったより大きなレベルの問題が、それが最も集中的に現われる都市への関心、さらにはこうした問題を歴史に探求しようとする近代都市史・都市化史への関心を高めているのである。⁽³³⁾

- (8) J.Reulecke[1989a], S.22, 30; [1993a], S.57; H.Matzerath[1985], S.17; [1989a], S.62; W.Krabbe[1989], S.5.
- (9) J.Reulecke/G.Huck[1981], pp.39-42; H.-J.Teuteberg[1983], S.5-25; J.Reulecke[1989a], S.21-6; H.Matzerath[1989b], S.25-6.
- (10) J.Reulecke[1993b], S.13-4. この3局面区分は大局的な流れを基準とするものであり、第1局面における「構造史」、あるいは第3局面における「日常史」の意義を高く評価しつつも、それをもって独自の局面とは見做していない。
- (11) J.Reulecke/G.Huck[1981], p.43; J.Reulecke[1989a], S.28; L.Niethammer[1986], S.117-9.
- (12) W.Köllmann[1960], S.V.
- (13) G.Ipsen[1956]; W.Brepohl[1957]; H.Croon[1960]; W.Hofmann[1964].
- (14) H.Herzfeld[1962], S.35. ヘルツフェルトは、そこで歴史的研究を待望されているテーマとして、上級市長職の発展、工業化過程の帰結、自治体合併などを挙げているが、これらはその後の研究方向を暗示しており、その先駆性には驚嘆せざるをえない。
- (15) ここで自治体学と近代都市史・都市化史との関係に言及しておきたい。自治体学は、Kommunalwissenschaften と複数形を取っていることから理解されるように、地方自治体(Gemeinde)を、歴史学、法学、政治学、行政学、経済学、経営学、地理学、社会学、建築学などの多様な学問と連携しつつ多面的かつ学際的に研究する学問領域のことであるが、通例農村自治体よりも都市自治体により大きな関心が向けられるため、その歴史的研究は都市史研究と大きく重なっているということが出来る。自治体学は20世紀初頭に成立・発展したが、個別学問の自律的発展やナチス期における自治体自治の崩壊の煽りを受けて大学で地歩を固めるには至らず、研究の中心は大学外の自治体学研究センター(後のドイツ都市学研究所)が担うことになった。『自治体学雑誌』はその機関誌である。こうしたなかで、自治体学は60年代末頃から地方自治の再評価という現実的要請の高まりを背景として、自治の実践との結びつきを強める一方で、その学際的性格を一層鮮明にしながら、大きく発展することになった(J.J.Hesse[1989])。
- (16) J.Reulecke[1978], S.11; [1982], S.9-10; [1989a], S.26-9; J.Reulecke/G.Huck[1981], p.44; H.-J.Teuteberg[1983], S.25-7; L.Niethammer[1986], S.117-9; H.Matzerath[1989b], S.23, 27.
- (17) J.Reulecke/G.Huck[1981], p.46; J.Reulecke[1982], S.10; [1989a],

S.29-30; [1993a], S.58.

(18) H.Herzfeld/C.Engeli[1975], S.14-5; J.Reulecke[1978], S.13-4; [1982], S.10-1; [1989a], S.30-1; J.Reulecke/G.Huck[1981], pp.44-5; H.Matzerath[1989a], S.62-3; [1989b], S.23-4, 28-9; L.Niethammer[1986], S.120-2. この他, 1973年にハノーファーに「空間研究アカデミーAkademie für Raumforschung」が設立され, 地理学者と歴史家の共同作業を次々と公開し, 1960年の発足以降主として中世都市史研究に従事していた南西ドイツ都市史研究会も1972年の年次大会で「南西ドイツ諸都市における工業化の歴史」をテーマに取り上げて以後19~20世紀の研究に着手した.

(19) C.Engeli/W.Hofmann/G.C.v.Unruh[1971]は, その際の報告と討論を公開したものである. また, 都市史のセクションは1974年と1980年のドイツ歴史家大会でも設けられたが, J.Reulecke[1978]は, 前者の報告者とオーガナイザーの論文をまとめたものである.

(20) H.Herzfeld/C.Engeli[1975], S.19.

(21) J.Reulecke[1978], S.12; [1982], S.10; [1989a], S.30; [1993a], S.58. 例えば, ロイターは1978年に「都市史叙述は全社会的な過程への地方毎に異なる関与の研究と叙述としてなされうる. この観点から見れば, 都市史は重要な理論的インプリケーションをもつ経済・社会史の一部になっている」と述べている (H.-A.Reuter[1978], S.68).

(22) J.Reulecke[1978], S.10; [1982], S.7-9, 13-4; [1989a], S.21, 26-27, 33-4; [1993a], S.57-61; L.Niethammer[1986], S.119-120.

(23) H.-J.Teuteberg[1983], S.27-8.

(24) Ebenda, S.34.

(25) なお, H.Matzerath[1989b], S.42 は, 「新都市史」がドイツでもかなりの影響力をもったことを認めつつ, それが社会的・空間的移動にテーマを局限したために支持を失ったと述べている. この他「新都市史」については, J.Kocka[1978], を参照.

(26) 但し, 経済学と政治学の影響は限られたものであった (C.Engeli/H.Matzerath[1989], S.13-14). またマルクス主義的観点も, 旧西ドイツの都市史研究には浸透しなかった (H.Matzerath[1989b], S.41).

(27) J.Reulecke/G.Huck[1981], p.41; H.-J.Teuteberg[1983], S.16-8; H.Matzerath[1985], S.9; J.Reulecke[1985], S.146.

(28) J.Reulecke/G.Huck[1981], p.46; J.Reulecke[1978], S.12, 14; [1982], S.12-4; [1989a], S.33-4, 36; [1993a], S.58-9, 60; [1993b], S.13-5; L.Niethammer[1986], S.121-2; H.Matzerath[1989b], S.24.

(29) J.Reulecke[1978], S. 9; [1982], S. 3-4; [1989a], S. 30. しかし, 様々な方法や概念の実験場として利用されることによって近代都市史研究の重要性が高まったことは, 独自の方法や概念がそのことを通じて開発されたことを意味するものではない. ロイレッケもマッツェラートもこの点に関しては否定的である (J.Reulecke[1989a], S. 31; H.Matzerath[1989a], S. 88; [1989b], S. 41) .

(30) H.Matzerath[1989b], S. 43. Vgl. [1989a], S. 62.

(31) J.Reulecke[1982], S. 13; [1993a], S. 62-3, 67-8; [1993b], S. 15-18, 20-1.

(32) マッツェラートは, これとは別に都市史の外部への委託の可能性を指摘しており, 具体例としてヴェストファーレンのリップシュタット (W.Ehbrecht[1985]) とシュペンゲ (W.Mager[1984]), 及びベルリン (W.Ribbe[1987]) の都市史編纂事業を挙げている (H.Matzerath[1989a], S. 84-6; [1989b], S. 43) .

(33) J.Reulecke[1993a], S. 62-3; H.Matzerath[1989a], S. 62-4; 藤田幸一郎[1991], 213-4.

4. ドイツにおける都市化の時期区分と都市の諸類型

都市化史研究において, もうひとつ論争的なテーマとして指摘しなければならないのが, 時期区分の問題である. その際, その指標との関連で重要なのが, 都市化と工業化・近代化との関係である. 後に見るように, ロイレッケもマッツェラートも, 都市化の時期区分を工業化の開始・進展を指標として行っており, 都市化は何よりも工業化を起動力として展開したと認識しているからである. しかも彼らに共通しているのは, 工業化を近代化と同格の独立変数として捉えるのではなく, むしろそれを都市化とともに全般的な近代化過程の一部として捉えるという視点である. 特にマッツェラートはこの点に詳しく論及している. すなわち, 彼によれば, 近代化は, 形式的には成長, 流動化, 革新, 合理化, 分業, 分化, 特化によって特徴づけられ, 内容的には, 都市の人口成長, 教育, コミュニケーション, 参加, 国家・国民形成, 経済成長 (工業化), 官僚制化, 世俗化, 地域的流動性, 新しい出生様式, サービス部門の成長といった現象を包摂している. 工業化は近代化の一部と位置づけられていることが分かるであろう. 他方, 都市の人口増加が含まれていることから都市化が近代化の一部と見做されていることもまた間違いない. しかし, 都市化は, 単に人口増加という側面だけでなく, 都市制度・都市のトポグラフィー・都市的定住

体の変化，都市経済の成長と構造変化，メンタリティーを含む住民の流動性と社会構造，都市施設の発展，行政の形態と組織，行政課題の範囲，参加の様式の変化などの多様な側面から考察されるべきであるとマッツェラートは主張し，しかも「都市化の部分諸局面が近代化の部分諸過程と広範囲に対応している」ことに注目する。都市化史研究は，近代化の諸過程を歴史的に検証するうえで好適な研究領域であるというわけである。このように，都市化，工業化，近代化の関係は必ずしも単純ではないが，都市化が工業化に牽引されつつ，それとともに近代化を推進したという限りで，この3つの過程が互いに密接に関わっていたことは否定できない。⁽³⁴⁾

さらに，付け加えておきたいのは，ロイレッケやマッツェラートにあっては，以上のように都市化が工業化・近代化と密接に結びつけられているため，当然のことながら中世・近世都市と近代都市との断絶が想定されているということである。実際ロイレッケは，近代都市史を「人間の共同生活の特殊な組織形態としての都市の転換」，あるいは「19世紀半ば以降のドイツ都市制度の猛烈な改造」の過程と捉えており，エンゲリ／マッツェラートも近代都市を中・近世都市からはっきり区別している。⁽³⁵⁾ここで中世以降の都市化の連続性を強調する見解を検討する余裕はないが⁽³⁶⁾，中世・近世都市と近代都市との連続と断絶という問題は，個々の都市の歴史的事情に大きく規定されていると思われるし，プロト工業化論のような，工業化とそれ以前の経済発展とを，断絶の可能性を認めた上で基本的には連続的に捉える見方に照らすならば，あまり固定的に理解すべきではないだろう。

そこで，都市化の時期区分の検討に入る。まずマッツェラートは，1815～1914年におけるプロイセンの都市化に関する包括的な研究を，(1)1815年から1840年頃までの助走ないし移行の局面，(2)1870年代初頭までの突破局面，(3)第一次大戦勃発をもって終わる本来的都市化局面，という時期区分のもとに行なっている。(1)の局面が助走ないし移行局面と位置づけられるのは，プロイセン改革による営業の自由の導入や都市名望家を担い手とする自治体自治の萌芽的形成といった新しい動きが一方でありながら，なお統一的な都市法が存在せず，都市と農村の法的区別を復活させようという動きさえあったというようにプロイセン当局の政策志向が一貫していなかったこと，あるいは西部では都市人口が平均を上回って上昇したのに対して，東部では農村人口の増加率のほうが高かったというように，都市化はUとVのいずれの意味でもなお語ることができなかったことなどが理由として挙げられる。しかし，1840年代初頭以降の(2)の局面に入ると，人口は西部だけでなく東部においても都市で顕著に増加し，Vとしての都市化は確固たるものとなった。こうした都市の発展を引き起こした

のは、言うまでもなく工業化によるものであるが、それは雇用の増大を意味し、鉄道の発達にも助けられて、都市への人口集中が急速に進展したのである。また、それに伴って都市内部においても社会的分極化、都市の空間的拡大、諸施設の建設、市民的名望家による自治体行政の進展などが見られた。

さらに(3)の本来的工業化局面に入ると、人口増加は殆どもっぱら都市に有利に作用し、農村→都市、東部→西部という人口移動が大きく進展した。それに伴って「大都市」が成立し、都市的發展は自治体合併などの形で周辺にも広がった。また、都市内部では(2)の局面から始まっていた機能分化がさらに進展した。都市自治は名望家に代わって自治体官僚によって担われるようになり、都市間競争によって増幅されつつ、衛生・住宅・社会制度、あるいはガス・水道・電気・道路といったインフラストラクチャーの整備が進んだ。こうした發展の原動力が依然として工業化であったことは言うまでもないが、この時期の特徴として重要なのは、Uという意味での都市化が工業化過程から次第に独立して進展したということである。すなわち、都市的生活様式や都市の経済力が都市の境界を越えて社会全体に浸透していったのである。こうして、プロイセンは第一次大戦前に都市化された国家になった。⁽³⁷⁾

次にロイレッケによれば、「19世紀半ば以降のドイツ都市制度の猛烈な転形」としての都市化は古典劇の構成をもっている。⁽³⁸⁾第1幕は、18世紀末から1850年代半ば頃までの大転換の「爆発」である。この局面では、多くの点で、法的・政治的基礎が創出され、社会経済的方向の転換がはかられた。1870年代半ばに至る第2幕では、こうして準備された不可逆的な發展が進行した。この局面では、工業化、V及びUの端緒が全般的近代化の他の過程と分かち難く結びついて展開した。發展の本来的頂点は第一次大戦前の30～40年に当たる第3幕においてであった。この局面において伝統的な都市制度は全般的都市化によって殆ど完全に転形し、ドイツは近代工業国の地位を達成した。第4幕は、二度の世界大戦と1945年以後の再建の時代に当たるが、この局面は、都市人口の一層の増大にもかかわらず、多くの退行的影響によって特徴づけられる。すなわち、Vの過程は完全に停滞したわけではなかったものの、第一次大戦後国内移動には決定的な変化が生じたのである。1960年代に始まった第5幕は現在なお進行中であり、その結末も明らかではない。しかし、「サブ都市化」「脱都市化」「反都市化」「脱集中化」といった新たな概念がこの局面になって登場していることから、今日のポスト工業化において、ドイツの高度工業化局面において成立した都市制度が大きな転換過程に入っていることが分かる。第一次大戦以降の都市化の退行ないし脱都市化の問題をも視野に収めている点が注目されるが、ここではロイレッケもマッツェラートと同様、大戦前に第二帝政期が

ドイツにおける都市化の本来的時期であると考えていることに留意したい。

最後に、クラッペの時期区分を検討するが、それは以下の3つの時期から構成される。⁽³⁹⁾(1)1800～1870年の準備期：近代都市制度の法的・経済的・社会的基礎が形成された。(2)1870～1920年の興隆期：ドイツは都市化された工業化社会となり、都市自治が高度な政治力を達成し、今日の都市インフラストラクチャーが具体化した。(3)1920年以降の守勢期：干渉国家の優位の増大に対する都市とその自治の比重の低下、がそれである。第1期は準備の時期であっただけでなく、伝統的な都市制度が没落した変革の時期であり、1808年のプロイセンを先頭として1830年代半ばまでに他の諸邦においても近代的自治体自治が導入された。しかし、都市は相変わらず、家屋・土地を所有するか営業を行なう名望家によって支配される「市民ゲマインデBürgergemeinde」であり、彼らの行政活動の内容は、以前とあまり変わらなかった。しかし、19世紀後半に入ると、都市化と工業化の進展によって自治体政策の条件が変化しはじめ、ドイツの都市制度は大きく変化することになった。第二帝政期とほぼ重なる第2期にこうした発展は頂点を迎え、「市民ゲマインデ」は広範な階層が市民権を獲得した「住民ゲマインデEinwohnergemeinde」に拡大した。それとともに、都市は新しい課題に直面するようになり、自治体行政は都市を発展に大きく介入するようになった。同時に都市は各種の給付行政システムを拡充して、いわゆる「自治体社会主義」を展開し、現代福祉国家を多くの点で先取りするサービスの中心地に発展した。それは、自治体行政の官僚制化・専門職化を伴う「尊厳・財産行政」から「給付行政」への展開を意味した。また、世紀転換期以降になると自治体の政党政治化が進んだ。

第一次大戦直後の時期は、都市制度の頂点であると同時に転換点でもあった。ワイマール共和政の成立によって民主主義的な政治体制がともかくも成立し、「市民ゲマインデ」から「住民ゲマインデ」への発展は完成した。しかし、1920年のライヒ財政改革によって自治体の財政的自立性は大幅に失われ、それは都市自治の興隆の終焉を意味するものであった。そしてクラッペは、これを画期としてドイツ都市化の第3期が始まったと考えている。すなわち、これ以後ドイツの自治体自治は、国家に対して後退を続けることになったのである。見られるとおり、自治体自治、自治体政策ないし「自治体社会主義」研究の専門家らしく、都市自治の在り方やそれと国家との力関係が時期区分の重要な指標となっている点に特徴があるが、ロイレッケやマッツェラートと同様に、第一次大戦前後をドイツ都市化史研究の重要な画期としている点は同じである。

次いで、近代ドイツ都市の諸類型についても検討しておこう。但し、この問題については、ロイレッケとマッツェラートよりも体系的な議論を行なってい

るG.ガッセルトとH.H.ブローテフォーゲルの所説を取り上げることにする。
(40)まず、ガッセルトは、都市を何よりも「消費都市」と見倣すW.ゾンバルト
説と「生産都市」と見倣すA.ウェーバー説を念頭に置きつつ、1907年の帝国統
計におけるドイツの大都市の職業構造を都市の核となる職業の比率の計算に基
づいて分析し、主要な36の都市を7つ（大きくは4つ）のグループに分類して
いる。彼の結論は「近代都市の典型が消費都市であるということは殆ど主張で
きない」というものであるが、それはともかくとして彼による分類結果は以下
のようになる。(41)

1. レントナー・官吏都市：ヴィースバーデン、シュトラースブルク、ケー
ニヒスベルク、ボーゼン、ミュンヘン、ハノーファー。
2. 工業都市：
 - a. 重工業都市：ゲルゼンキルヒェン、ボーフム、エッセン、デュイスブ
ルク、ドルトムント。
 - b. 繊維工業都市：プラウエン、クレーフェルト、アーヘン、エルバーフ
ェルト＝バルメン、ケムニッツ。
 - c. 機械工業都市：デュッセルドルフ、マンハイム、ニュルンベルク、マ
グデブルク、ライプツィヒ。
 - d. 機械工業・レントナー・官吏・軍事都市：キール、ハレ、カールスル
ーエ、カッセル、ブラウンシュヴァイク、エアフルト。
3. 中心地都市：ケルン、シュトゥットガルト、ベルリン、ブレスラウ、ド
レスデン。
4. 商業都市：ハンブルク、ブレーメン、フランクフルト、シュテットイン。

次にブローテフォーゲルも、同じく1907年の帝国統計を資料として42の大都
市の機能的類型化を試みている。ブローテフォーゲルの分類方法は、まず工業
ないしサービス業就業者の割合にしたがって、都市を「サービス都市」（
鉱工業就業者45.5%以下）、「多機能都市」（鉱工業就業者45.5～55%）、「
多機能都市」（鉱工業就業者55%以上）に大別し、それをさらに3～4つに細
分する（その基準は省略）というものである。その分類結果は以下の通りであ
る。(42)

1. サービス都市

1. 1. 混合構造を伴うサービス都市：シュテットイン、シャルロッテ
ンブルク、ハノーファー、ミュンヘン。

1. 2. レントナー都市：ヴィースバーデン。
1. 3. 行政・軍事都市：ケーニヒスベルク，ダンツィヒ，シェーネベルク，ポーゼン，キール，カールスルーエ，シュトラースブルク。
1. 4. 商業都市：ハンブルク，アルトナ，ブレーメン，フランクフルト。
2. 多機能都市
 2. 1. 重点のない多機能都市：ドレスデン，カッセル，ケルン，シュトゥットガルト。
 2. 2. 衣料工業に重点のある多機能都市：エアフルト，ブレスラウ，ベルリン。
 2. 3. 機械工業に重点のある多機能都市：マグデブルク，マンハイム，ブラウンシュヴァイク，デュッセルドルフ，ライプツィヒ，ハレ。
3. 工業都市
 3. 1. 混合構造をもつ工業都市：リュクスドルフ，ニュルンベルク。
 3. 2. 繊維工業都市：プラウエン，ケムニッツ，バルメン，エルバーフェルト，クレーフェルト，アーヘン。
 3. 3. 鉱山・重工業都市：ゲルゼンキルヒェン，ボーフム，エッセン，デュイスブルク，ドルトムント。

差異を含むとはいえ，この分類結果はガッセルトのものとほぼ一致すると考えて良い。その際いずれの場合にも，都市の類型化の基準が職業構造，とりわけ鉱工業とサービス業の就業者比率に求められており，都市化やそれに伴う都市の社会経済的構造に及ぼした工業化・近代化の影響がここでも重視されていることが注意されるべきである。

(34) H. Matzerath/K. Ogura[1975], S. 252-3; H. Matzerath[1985], S. 20-23. もちろん，マッツェラートも断わっているように，近代化概念には「伝統」から「近代」への累積的な変化という想定が基礎にあるわけであるが，現実の過程は不均等かつ部分的で，阻害ないし逆行もしばしば見られたことは言うまでもない。なお，ロイレッケも同様の理解を示していることについては，J. Reulecke[1977], S. 272, を参照。

(35) J. Reulecke[1985], S. 7, 9; C. Engeli/H. Matzerath[1989], S. 11.

(36) マッツェラートは，そうした見解を代表する著作として，P. M. Hohenberg/L. H. Lees[1985] と J. de Vries[1984] を挙げている（H. Matzerath[1989a], S. 67-70.

(37) H. Matzerath[1985], S. 9-12. 統計上の都市概念を用いるならば、ドイ

ッでは既に1910年に全人口の59.9%が都市に住んでおり、人口10万人以上の大都市の数も1800年に2、1850年に4だったのが、1871年に8、1890年に26、1910年に48、1939年に69と急速にその数を増し、大都市人口の全人口に占める比率も1871年の5%から1939年の32%へと顕著に増加しており、こうした数字からもドイツが1870年代～1930年代、とりわけ第一次大戦前に急速な都市化を経験したことが分かる（H.Matzerath/K.Ogura[1975], S.235）。

(38) J.Reulecke[1985], S.9-10.

(39) W.Krabbe[1989], S.176-82.

(40) もちろん、マツェラートは工業都市、港湾都市、行政・文化都市、宮廷都市、大学都市といった様々なタイプの都市があることに簡単にではあるが言及しており（H.Matzerath/K.Ogura[1975], S.235-7）、ロイレッケも、都市人口の年齢構成に基づいて、19世紀末～20世紀初頭のドイツの都市を次の3つのタイプに分けている。(1)ベルリン、ミュンヘン、ハノーファー、ハンブルク、フランクフルトなどの長い伝統をもち、中間層人口の割合が高い首都・商業都市（15歳以下約25%、15～60歳約70%、60歳以上約5%）；(2)オーバーハウゼン、ゲルゼンキルヒェン、ケーニヒスヒュッテといったライン＝ヴェストファーレンとオーバーシュレージエンの「新」工業都市（15歳以下の人口が帝国平均を明らかに上回る一方で高齢者の割合が極端に低い）；(3)バルメン、エルバーフェルト、クレーフェルト、ケムニッツのような大体は繊維工業を中心とする「旧」工業都市とデュッセルドルフのような19世紀後半に急速に成長した行政都市（(1)と(2)の中間的比率を示す）（J.Reulecke[1985], S.76-7）。

(41) G.Gassert[1917].

(42) H.H.Blotevogel[1979]. もうひとつ都市の類型化を試みているものとして H.-D.Laux[1983]がある。分類の特徴を挙げれば、(1)資料はやはり帝国統計であるが、1907年だけでなく1882年の統計も利用して25年間の変化にも留意していること、(2)考察対象に大都市だけでなく中小都市をも含めているが、逆にプロイセン邦の都市（1880年と1905年の人口調査に基づきそれぞれ69と87）だけに限っていること、(3)都市分類の基準を、「サービス都市」（サービス業就業者53.32%以上）、「工業都市」（工業就業者57.88%以上）、「多機能都市」（前二者に該当しない都市）としていることとなる。この基準そのものはブローテフォーゲルのものとそれほど変わらないということになるが、分類結果はかなり異なり、例えば、ハノーファー、ケルン、シュテットインは商業都市、ハレはレントナー・大学都市、デュッセルドルフ、エアフルトは重点のない多機能都市となる。

5. ドイツ近代都市史・都市化史研究のテーマ

ロイレッケによれば、70年代以降歴史家によって好んで取り上げられた都市史のテーマは、(1)都市自治 (städtische Selbstverwaltung) ないし自治体自治 (kommunale Selbstverwaltung) に関わる問題の再検討、(2)都市における経済的・人口学的状態の分析、及び(3)「日常史」と「新都市史」の受容に伴い都市史研究の視野が広がったこと、の3つであった。⁽⁴³⁾このうち(3)は具体的なテーマというよりも、既に言及した方法・視角に関わるものであるからここでは除外して、(1)(2)について若干敷衍すると以下ようになる。⁽⁴⁴⁾

まず(1)の都市自治ないし自治体自治の問題から見る。⁽⁴⁵⁾このテーマはドイツでは長い伝統をもっていたが、1970年頃以降ミクロとマクロの接する場としての都市を対象とする近代都市史・都市化史研究が興隆するなかで、地方政治の磁場における構造や指導的人物、とりわけ上級市長 (Oberbürgermeister) が一般的な政治的発展と結びつけられるようになった点に新しさがあった。⁽⁴⁶⁾さらに、都市自治の財政的基礎、あるいは自治体給付行政 (kommunale Leistungsverwaltung) と生存保証 (Daseinsvorsorge) の問題が視野に収められるようになった。特に自治体給付・生存保証の研究は、政党や政治グループの具体的な地方的影響力による自治体政治の綱領作成とともに、伝統的な自治体史や自治政策史が、見通しの効くシステムにおける政治権力の具体的現われ (「政治文化」) への注目という新しい観点と結びつくことによって、大きく進展した。⁽⁴⁷⁾

次に(2)の都市の経済的・人口学的分析は、都市化と国内移動の全般的過程を個別事例に即して、それ以前よりも詳細に明らかにしようと試みたものであり、この過程で、経済史、社会史、人口史の境界が流動的になった。社会的転換に関する研究では、この過程の地域的特殊性と並んで、転換から生じるコンフリクトやその解決への努力の分析が試みられた。ここでは何よりもW.ケルマンのバルメン研究が想起されるべきであるが、その他にも、W.フィッシャーやW.コンツェの研究、あるいは歴史的近代化理論の受容のもとで、工業化と近代化の影響下にあった個々の都市あるいは都市-農村関係全体の発展に関する研究が1970年代に多数出現することになった。⁽⁴⁸⁾

さらに、ロイレッケは近年の都市化史研究における重要なテーマとして、以下の6点を挙げている。⁽⁴⁹⁾

(1)都市史研究と都市史叙述の方法・対象・目標設定に関する議論がますます深まった。その場合、「地域のアイデンティティ」を獲得・維持するために、

学校、自治体政策、都市景観の保存における都市史的研究の成果の意味と形態が論じられた。

(2)都市自治のスペクトル、都市制度の具体的現象形態、あるいは法の制定がますます心性的な空間・時間カテゴリーと結びつけられるようになった。このことを通じて、階層毎に特別な行動の余地、経験・社会化及び計画の空間並びに個々の行為する人間の「社会的」時間が視野に入り、様々な空間と時間の併存と部分的対立を確認することによって、都市化過程における都市社会と社会全体のダイナミクスに関する新たな認識が引き出されるようになった。

(3)これと関連して、移動・適応過程、都市の社会的組立における平準化と差異化が様々な形で言及されるようになった。研究のスペクトルは、都市住民の純粹に人口学的な分析から、空間的・社会的移動の研究を経て、様々な住居・健康・所得状態、余暇、さらには選挙に際しての様々な都市地区における政治的結合の研究にまで及んだ。この関連で、都会的社会の形成が決して完全に直線的な過程ではなく、非常に矛盾した過程であり、その起動力もまさに内的二元性によって駆り立てられたことが明らかになった。すなわち、平準化の趨勢は差異化の趨勢と並存しており、集中化現象は分散化現象によって妨害され、統合は分離と対峙しているのである。しかし、それと同時に諸都市は19世紀末に多くの点で後の社会国家のための実験場・アイデア提供者でもあった。都市的・都会的生活スタイルの社会全体への拡散は、さしあたり都市的な生存保証と給付行政の国家全体の地平への一般化と相関していたのである。(50)

(4)定住地の建設、土地利用、都市建築、都市建設政策の現実的作用のような諸原則は、もはや個別には取り扱われず、都市社会と社会全体の指導的觀念と権力構造の文脈で研究されるようになった。こうして、都市のインフラストラクチャーの整備は、もはや単なる技術的革新の移転や組織の問題としてではなく、社会政策的・衛生学的・産業資本的な要求への対応と見なされるようになった。

(5)地域を「工業化にとって本質的に能動的な領域単位」と理解する経済史の動向や、クリスターラーの中心地理論の都市地理学者による彫啄といった近年の動向と関連しつつ、都市-周辺関係や諸地域における都市の立地機能に別の光が当てられるようになった。それはなお主として経済的であるが、萌芽的には既に都市的生活形態の拡散や、もはや大都市とだけ結びついているわけではない社会全体の「都市性」の成立に関するものである。

(6)こうした局面は、文化や学問の中心地としての、また特別な社会文化的環境の枠組みとしての(大)都市の役割を視野に収める。その場合、民俗学や歴史的志向をもつ政治学が刺激的に作用した。この関連で、都市イデオロギーの

批判的分析が再び地歩を固めた。これは、もちろん孤立してではなく、例えば心性史研究との関連において、都市住民の空間経験・同一化の模範となった。

次に、マッツェラートも都市史研究における現時点での重点を列挙している。ロイレッケのものと重なる点もあるが、独自の整理なので、ほぼそのままの形で紹介する。⁽⁵¹⁾

(1)都市の基本的次元のひとつとしての人口：この領域は都市の人口学的構造に関するケルマンによる一連の仕事によって基礎が据えられたが⁽⁵²⁾、それを踏まえて個々の地方レベルでの詳細な研究が行なわれるようになった。その後関心は人口移動の過程と工業時代における大都市の人口学的構造にとってのその意義、あるいは自然人口移動、出生率、死亡率、結婚率、出生力などに向けられるようになった。⁽⁵³⁾

(2)人口成長と結びついた社会構造の根本的变化：この領域でもケルマンのバルメン研究を模範とした他の都市の研究、外国の社会史研究者の研究、労働者の歴史、職業構成に基づく地方社会の全体構成、階層分析などが挙げられる。⁽⁵⁴⁾但し、分析の前面に出てきたのは、客観的で量的に把握できる構造やその変化であり、メンタリティー、生活条件、日常はあまり取り上げられなかった。⁽⁵⁵⁾その他近年注目されているテーマとしては、結社のような都市の社会生活、教会・教会組織の社会史的意義、住宅・住宅問題の歴史、階層毎の住宅事情などを指摘することができる。⁽⁵⁶⁾

(3)空間構造と都市建設の発展：この領域は、主として地理学、定住史、都市建設史の対象として取り扱われた。クリスターラーの中心地概念の適用、都市内部の土地利用・建設構造、大都市周辺の定住構成の発展などが具体的テーマとして挙げられるが⁽⁵⁷⁾、とりわけ重要だったのが、19世紀末以降の大都市成長の中心的現象で、都市域の飛躍的拡大をもたらした自治体合併（Eingemeindung）である。⁽⁵⁸⁾

(4)都市建設史・計画史：この領域の議論で問題となるのは、都市建設への政治的・経済的決定の反映よりも、計画の構想、担い手、装置のほうであり、G. Feh1/J. Rodriguez-Lores[1980]; [1983]; J. Rodriguez-Lores/G. Feh1[1985]は、その重要な成果である。19世紀後半における大都市の発展の過程で、新しいタイプの公共建築、営業建物、工場施設、駅舎、新たな都市地区、公園、記念碑などが建設されたが、それらは、都市の再開発とともに都市建設の在り方を考察する上で大きな意義をもっていたのである。但し、20世紀に入ると、特に工業集積地における計画は、必然的に都市域の境界を越えてより広い空間を覆うようになっており、こうした問題に関する研究も登場しつつある。⁽⁵⁹⁾さらに、都市発展にとって交通がもった意義についての研究も端緒的ながら開始されて

いる。総じて、都市建設・計画の歴史は、様々な学問分野の関心の交差点にあるということができる。

(5)個々の都市の経済発展：経済成長（工業化）は都市化の本来的原動力であったが、それにもかかわらず、個々の都市の経済発展の研究は、社会史的局面と比べると遅れている。⁽⁶⁰⁾その理由としては、経済史的分析にはしばしば都市の境界を越える空間的枠組みが選ばれたという事情が挙げられる。しかし、都市の発展にとって経済成長や経済構造の変化の問題は重要であり、サービス部門の分析や都市間比較、さらには成長だけでなく停滞や後退といったこれまであまり顧みられなかった問題の研究を加えて、今後とも進められる必要があろう。また、これとの関連で注目されるべき重要なテーマが、19世紀末より興隆した自治体経済（Kommunalwirtschaft）をめぐる諸問題である。⁽⁶¹⁾自治体経済は、経済と政治の境界領域に位置することもあるが、その歴史的展開への関心は遅れていたが、近年給付行政の発展という視点から関心が高まってきた。自治体経済の経済全体にとっての意義、地方の立地・産業誘致政策についてのその役割がその場合の重要な論点となろう。

(6)自治体自治の歴史、及び自治体政策・自治体行政の発展：この領域に関する具体的なテーマとしては、地方レベルでの選挙法と選挙、自治体執行部の社会的構成、上級市長の官職や人物、自治体政策についての企業家の役割、政党と自治体政策、自治体財政、自治体と国家との関係などが考えられるが、「議論の不均等な存続」が確認される。研究の進展が目立つのは上級市長や政党との関連についてであり⁽⁶²⁾、これに対して選挙法や選挙に関しては H. Croon[1960] がなおスタンダード・ワークで、自治体執行部の社会的構成についても W. Hofmann[1964] に続く研究が出ていない。自治体と国家との関係についても議論は停滞している。19世紀後半の行政課題の飛躍的増大、それと結びついた行政組織の拡大と分化、行政スタッフにとってのその帰結も今後の研究の進展が期待されるテーマである。そうしたなかで、近年特に注目を集めているのが、給付行政と生存保証についてである。エネルギー供給、下水設備の導入、都市衛生の改善、食糧供給と廃棄物処理などが具体的なテーマであるが、既に示唆したようにこの分野の代表的研究者と目されるのが W. クラッペであり、多くの研究を発表している。⁽⁶³⁾

(7)一般的事件・過程の都市的特徴：このような課題設定は通例個々の都市や地域のサイドから生まれるものではないが、1848年革命、1918年革命、世界経済恐慌、国民社会主義、第二次大戦後の復興といった大きな歴史的事件・画期が都市レベルでどのように展開したのかは興味深く、また十分意味のあるテーマである。⁽⁶⁴⁾なかでも国民社会主義の影響については、その台頭、権力掌握、

ユダヤ人の運命、抵抗と追放、戦争末期のナチス体制への忠誠の崩壊といった問題について、既に数多くの個別研究が公刊されているが、ナチス期における一都市の発展の満足できる総体的分析はまだ存在していない。⁽⁶⁵⁾

(8)都市化された社会における都市の意義と機能：この問題へのアプローチとしては、発展過程の諸段階、都市制度の基本構造、個々の都市類型の基本機能を解明することがまず挙げられるが、もうひとつのアプローチとして、都市＝周辺関係ないし都市＝農村関係の変化の分析が考えられる。⁽⁶⁶⁾先にも触れたように、都市ないし都市化の内容的な定義が容易でないとすれば、都市を農村との対比において把握するという手法が要請されるからである。また、この点とも関連して「都市」のイメージがどのような反応を生み出したかということも重要なテーマである。⁽⁶⁷⁾

以上からも明かなように、近代都市史・都市化史研究のテーマが恐ろしく多様である。実際ロイレッケは「全体として見ると、近年の近代ドイツ都市史研究のスペクトルは、戦後の最初の25年間よりも格段と広がった」と総括している。このことは、ただでさえ学際的な性格が強いこの研究領域の輪郭がますます曖昧になっていることを意味するが、他方でなお遅れている第一次大戦後の時期の研究とともに、近代都市史・都市化史研究が多様な発展の可能性を秘めていることをも示唆していると言うこともできる。⁽⁶⁸⁾

(43) J. Reulecke/G. Huck[1981], pp. 45-6; J. Reulecke[1982], S. 11-2; [1989a], S. 31-2; [1993a], S. 59-60.

(44) なお(1)(2)は、戦後のドイツ近代都市史・都市化史研究の二大テーマとして、工業化過程と工業的社会の発展における都市の役割、及び自治体自治(kommunale Selbstverwaltung)の問題を挙げているマッツェラートの考えとほぼ一致する(H. Matzerath[1989b], S. 27)。

(45) J. Reulecke[1982], S. 11; [1989a], S. 31; [1993a], S. 59-60.

(46) 代表的な研究としては、C. Engeli[1971]; W. Hofmann[1974]; D. Reben-tisch[1975]を挙げることができる(J. Reulecke/G. Huck[1981], p. 45)。

(47) ロイレッケ／ハックは、この領域に関わる研究は数多くあるが、A. v. Saldern[1973]; H. Matzerath[1970]; O. Ziebill[1972]の3書を挙げれば十分であるとしている(J. Reulecke/G. Huck[1981], p. 52)。

(48) J. Reulecke/G. Huck[1981], pp. 45-6, 52-3; J. Reulecke[1982], S. 11; [1989a], S. 32. この領域に関する代表的著作として指摘できるのは、I. Fischer[1977]; I. Thienel[1973]; J. Reulecke[1973]; K. Jasper[1977]である。

(49) J. Reulecke[1989a], S. 34-6; [1993a], S. 63-5.

- (50) この問題を詳細に論じたのが、J. Reulecke[1989b]である。
- (51) H. Matzerath[1989b], S. 30-40. Vgl. [1989a], S. 71-83. なお、マツェラートはかなり詳細な文献案内をしているが、ここでは筆者が内容を確認できたものに限って、一部追加しながら言及するにとどめる。
- (52) W. Köllmann[1960]; [1974].
- (53) D. Langewiesche[1977], [1979]; J. Knodel[1979].
- (54) A. Gladen[1970]; P. Ayçoberry[1975]; H. Zwahr[1978]; D. F. Crew[1979]; K. Ditt[1982].
- (55) D. Saalfeld[1984]; H. J. Schwippe/C. Zeidler[1984].
- (56) L. Niethammer/F. Brüggemeier[1976]; L. Niethammer[1979]; J. F. Geist/K. Kürvers[1980], [1984], [1989]; C. Wischermann[1983]; H. -J. Teuteberg[1985]; H. -J. Teuteberg/C. Wischermann[1985].
- (57) H. H. Blotevogel[1975]; I. Thienel[1973].
- (58) H. Matzerath[1978]; D. Rebentisch[1978].
- (59) D. Rebentisch[1975b]; C. Engeli[1986].
- (60) W. Fränken[1969]; W. Hoth[1975]; E. Maschke/J. Sydow[1977].
- (61) O. Büsch[1960]はこのテーマに関する先駆的研究であるが、最近の代表的な研究は G. Ambrosius[1984]である。
- (62) 上級市長研究については、注(44)を参照。政党との関係については、G. Füllberth[1984](SPD); B. Herlemann[1977]; V. Wunderich[1980](KPD)が挙げられる。
- (63) 総括的なものとしてW. Krabbe[1979], [1983], ドルトムントとミュンスターに関するモノグラフィーとして[1985]を挙げておく。他に領域別の研究として、H. -D. Brunckhorst[1978](ガス経済); J. v. Simson[1983](下水施設と都市衛生); J. Sydow[1981](給水・排水)がある。
- (64) K. -D. Schwarz[1971]; U. Büttner[1982]; H. Pietsch[1978]; O. Dann[1981]; W. Först[1984].
- (65) 具体的な個別研究については、H. Herzfeld/G. Engeli[1975], S. 10-1; H. Matzerath[1989b], S. 37-8, を参照。
- (66) M. Glettler/H. Haumann/G. Schramm[1985]; G. Wiegelmann[1978].
- (67) ここで問題となるのが、大都市に近代社会の病原を見る「大都市嫌悪 Großstadtfeindschaft」である。この問題は、L. Bergmann[1970]によって先鞭をつけられたが、さらに A. Lees[1985]によって国際比較が行なわれ、都市化への反発はドイツで最も激しかったことが明らかにされた。なお、この問題については、J. Reulecke[1985], S. 139-43, をも参照

6. おわりに

以上、ロイレッケとマツェラートの研究に主として依拠しつつ、ドイツにおける近代都市史・都市化史研究の諸問題を考察してきた。この作業をひとまず終えるに際して確認しておきたいのは、歴史学のこの分野がドイツ歴史学の大きな流れの縮図であるということである。すなわち、現在のドイツ歴史学界は、近年発言力を再び高めたかに見える「新歴史主義」の動きを別とすれば、1960年代以降地歩を築いた「歴史的社会科学」ないし「社会史」と、1980年代に入ってそれを批判する形で登場した「日常史」とが並存し、両者の架橋が目指されているのがドイツ歴史学界の現段階であると言って良いが⁽⁶⁹⁾、こうした学界動向が近代都市史・都市化研究の在り方にも大きく影響しているのである。もちろん、基本的には上の認識を共有しているロイレッケとマツェラートの間にも力点の置き方には違いが見られる。前者には、理論的・方法的基礎の強化の必要を認めつつも、「日常史」あるいは「歴史のコミュニケーション機能」への強い共感が読み取れるのに対して⁽⁷⁰⁾、後者は、都市史に「自己確認への志向」を求める動きに留意しつつも、全体として近代都市史を「歴史的社会科学」と見做しているからである。⁽⁷¹⁾ しかしいずれにしても、この分野が歴史学の二大潮流・方向のあるべき関わり方を模索する上で極めて有利な位置にあると認識されていることは間違いないであろう。⁽⁷²⁾

本稿の目的は、ドイツにおける近代都市史・都市化史研究を整理・紹介することに限定されているが、言うまでもなくこの作業自体は何ら自足的なものではありえず、筆者自身の今後の具体的研究の方向づけ、あるいは研究史へのその位置づけのための手がかりにすぎない。このことを確認して本稿を終えることにしたい。

(69) J. コッカ[1994], 第1, 3, 10章。

(70) J. Reulecke[1982], S. 12-3; [1993a], S. 66-8; [1993b], S. 13-5.

(71) H. Matzerath[1989b], S. 40-2. Vgl. [1989a], S. 87-8.

(72) ロイターも1978年の時点で「都市史研究には、連邦共和国の歴史学全体を特徴づける発展を見て取ることができる。すなわち、“伝統的な”方向と並んで、個別には極めて多様に構想され、より社会科学的な志向をもつ方向に踏み出されたが、それは決して緊張なしには進展しない経過である」と述べているが、適切な認識と思われる(H.-G. Reuter[1978], S. 69)。

邦語文献

- [1] 藤田幸一郎『都市と市民社会 — 近代ドイツ都市史 — 』青木書店, 1988年.
- [2] 藤田幸一郎「ヨーロッパ近代都市社会史研究の成果と課題 — ドイツ — 」『歴史評論』第500号, 1991年.
- [3] 北住炯一『近代ドイツ官僚国家と自治 — 社会国家への道 — 』成文堂, 1990年.
- [4] J. コッカ (肥前栄一・杉原達訳) 『歴史と啓蒙』未来社, 1994年.

欧語文献

AfK = Archiv für Kommunalwissenschaften

AfS = Archiv für Sozialgeschichte

GG = Geschichte und Gesellschaft

ZSSD = Zeitschrift für Stadtgeschichte, Stadtsoziologie und Denkmalpflege

- [1] G. Ambrosius, Die öffentliche Wirtschaft in der Weimarer Republik. Kommunale Versorgungsunternehmen als Instrumente der Wirtschaftspolitik, Baden-Baden 1984.
- [2] P. Ayçoberry, Der Strukturwandel im Kölner Mittelstand 1820-1850, in: GG, Jg. 1, 1975, S. 78-98.
- [3] K. Bergmann, Agrarromantik und Großstadtfeindschaft, Meisenheim 1970.
- [4] H. H. Blotevogel, Zentrale Orte und Raumbeziehungen in Westfalen vor der Industrialisierung (1780-1850), Münster 1975.
- [5] H. H. Blotevogel, Methodische Probleme der Erfassung städtischer Funktionen und funktionaler Städtetypen anhand quantitativer Analysen der Berufsstatistik 1907, in: W. Ehbrecht [1979], S. 217-269.
- [6] W. Brepohl, Industrievolk im Wandel von der agraren zur industriellen Daseinform dargestellt am Ruhrgebiet, Tübingen 1957.
- [7] H. -D. Brunckhorst, Kommunalisierung im 19. Jahrhundert, dargestellt am Beispiel der Gaswirtschaft in Deutschland, München 1978.
- [8] O. Büsch, Geschichte der Berliner Kommunalwirtschaft in der Weimarer Epoche, Berlin 1960.
- [9] U. Büttner, Hamburg in der Staats- und Wirtschaftskrise 1928-1931, Hamburg 1982.

[10] D.F.Crew, Town in the Ruhr. A Social History of Bochum, 1860-1914, New York etc. 1979.

[11] W.Christaller, Die zentralen Orte in Süddeutschland. Eine ökonomisch-geographische Untersuchung über die Gesetzmäßigkeit der Verbreitung und Entwicklung der Siedlungen mit städtischen Funktionen, Jena 1933, Darmstadt 1968².

[12] H.Croon, Die gesellschaftlichen Auswirkungen des Gemeindewahlrechts in den Gemeinden und Kreisen des Rheinlands und Westfalens im 19. Jahrhundert, Köln-Opladen 1960.

[13] H.Croon/W.Hofmann/G.C.v.Unruh, Kommunale Selbstverwaltung im Zeitalter der Industrialisierung, Stuttgart 1971.

[14] O.Dann(Hg.), Köln nach dem Nationalsozialismus.Der Beginn des gesellschaftlichen und politischen Lebens in den Jahren 1945/46, Wuppertal 1981.

[15] J. de Vries, European Urbanization 1500-1800, London 1984.

[16] K.Ditt, Industrialisierung, Arbeiterschaft und Arbeiterbewegung in Bielefeld 1850-1914, Dortmund 1982.

[17] W.Ehbrecht(Hg.), Lippstadt. Beiträge zur Stadtgeschichte, Lippstadt 1985.

[18] C.Engeli, Gustav Böss: Oberbürgermeister von Berlin 1921 bis 1930, Stuttgart 1971.

[19] C.Engeli, Landesplanung in Berlin-Brandenburg. Eine Untersuchung zur Geschichte des Landesplanungsverbandes Brandenburg-Mitte 1929-1936, Stuttgart 1986.

[20] C.Engeli/H.Matzerath(Hg.), Moderne Stadtgeschichtsforschung in Europa, USA und Japan, Stuttgart u.a. 1989.

[21] C.Engeli/H.Matzerath, Moderne Stadtgeschichtsforschung in Europa, USA und Japan - Eine Einführung, in: C.Engeli und H.Matzerath(Hg.)[1989], S.9-20.

[22] G.Fehl/J.Rodriguez-Lores(Hg.), Städtebau um die Jahrhundertwende, 1980.

[23] G.Fehl/J.Rodriguez-Lores(Hg.), Stadterweiterungen 1800-1975. Von den Anfängen des modernen Städtebaues in Deutschland, Hamburg 1983.

[24] I.Fischer, Industrialisierung, sozialer Konflikt und politische Willensbildung in der Stadtgemeinde. Ein Beitrag zur Sozialgeschichte Augsburgs 1840-1914, Augsburg 1977.

- [25] W.Först(Hg.), Städte nach zwei Weltkriegen, Stuttgart u.a. 1984.
- [26] W.Fränken, Die Entwicklung des Gewerbes in den Städten Mönchengladbach und Rheyd im 19. Jahrhundert, Köln 1969.
- [27] G.Füllberth, Konzeption und Praxis sozialdemokratischer Kommunalpolitik 1918-1933: Ein Anfang, Marburg 1984.
- [28] G.Gassert, Die berufliche Struktur der deutschen Großstädte nach der Berufszählung von 1907, Greifswald 1917.
- [29] J.F.Geist/K.Kürvers, Das Berliner Miethaus 1740-1862, München 1980.
- [30] J.F.Geist/K.Kürvers, Das Berliner Miethaus 1862-1945, München 1984.
- [31] J.F.Geist/K.Kürvers, Das Berliner Miethaus 1945-1989, München 1989.
- [32] A.Gladen, Der Kreis Tecklenburg an der Schwelle des Zeitalters der Industrialisierung, Münster 1970.
- [33] M.Glettler/H.Haumann/G.Schramm(Hg.), Zentrale Städte und ihr Umland. Wechselwirkungen während der Industrialisierungsperiode in Mitteleuropa, St.Katharinen 1985.
- [34] B.Herlemann, Kommunalpolitik der KPD im Ruhrgebiet 1924-1933, Wuppertal 1977.
- [35] H.Herzfeld, Aufgaben der Geschichtswissenschaft im Bereich der Kommunalwissenschaften, in: AfK, Jg.1, 1962, S.27-40.
- [36] H.Herzfeld/C.Engeli, Neue Forschungsansätze in der modernen Stadtgeschichte, in: AfK, Jg.14, 1975, S.1-21.
- [37] J.J.Hesse(Hg.), Kommunalwissenschaften in der Bundesrepublik Deutschland, Baden-Baden 1989.
- [38] J.J.Hesse, Kommunalwissenschaften in der Bundesrepublik Deutschland, in: J.J.Hesse[1989], S.11-20.
- [39] W.Hofmann, Die Bielefelder Stadtverordneten. Ein Beitrag zur bürgerlichen Selbstverwaltung und sozialem Wandel 1850-1914, Lübeck-Hamburg, 1964.
- [40] W.Hofmann, Zwischen Rathaus und Reichskanzlei: die Oberbürgermeister der Weimarer Republik, Stuttgart u.a. 1974.
- [41] P.H.Hohenberg/L.H.Lees, The Making of Urban Europe, Cambridge/Mass. 1985.

- [42] W.Hoth, Die Industrialisierung einer rheinischen Gewerbestadt -- dargestellt am Beispiel Wuppertal Köln 1975.
- [43] G.Ipsen, Stadt(VI) Neuzeit, in: Handwörterbuch der Sozialwissenschaften, Bd.9, Stuttgart u.a. 1956, S.786-800.
- [44] K.B.Jasper, Der Urbanisierungsprozeß dargestellt am Beispiel der Stadt Köln, Köln 1977.
- [45] J.Kocka, Stadtgeschichte, Mobilität und Schichtung, in: AfS, Bd.18, 1978, S.546-558.
- [46] J.Knodel, Stadt und Land im Deutschland des 19.Jahrhunderts: eine Überprüfung der Stadt-Land-Unterschiede im demographischen Verhalten, in: W.H.Schröder[1979].
- [47] W.Köllmann, Sozialgeschichte der Stadt Barmen im 19. Jahrhundert, Tübingen 1960.
- [48] W.Köllmann, Bevölkerung in der industriellen Revolution, Göttingen 1974.
- [49] W.R.Krabbe, Munizipalsozialismus und Interventionsstaat. Die Ausbreitung der städtischen Leistungsverwaltung im Kaiserreich, in: Geschichte in Wissenschaft und Unterricht, Bd.30, 1979, S.265-283.
- [50] W.R.Krabbe, Die Entfaltung der kommunalen Leistungsverwaltung in deutschen Städten des späten 19. Jahrhunderts, in: H.-J.Teuteberg(Hg.)[1983], S.373-391.
- [51] W.R.Krabbe, Kommunalpolitik und Industrialisierung. Die Entfaltung der städtischen Leistungsverwaltung im 19. und 20. Jahrhundert. Fallstudien zu Dortmund und Münster, Stuttgart u.a. 1985.
- [52] W.R.Krabbe, Die deutsche Stadt im 19. und 20. Jahrhundert, Göttingen 1989.
- [53] D.Langewiesche, Wanderungsbewegungen in der Hochindustrialisierungsperiode. Regionale, interstädtische und innerstädtische Mobilität, in: Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Bd.64, 1977, S.1-40.
- [54] D.Langewiesche, Mobilität in deutschen Mittel- und Großstädten. Aspekte der Binnenwanderung im 19. und 20. Jahrhundert, in W.Conze/U.Engelhardt(Hg.), Arbeiter im Industrialisierungsprozeß, Stuttgart 1979, S.70-93.
- [55] H.-D.Laux, Demographische Folgen des Verstädterungsprozesses. Zur Bevölkerungsstruktur und natürlichen Bevölkerungsentwicklung deutscher Städtetypen 1987-1914, in: H.-J.Teuteberg(Hg.)[1983], S.65-93.

- [56] A. Lees, Cities Perceived. Urban Society in European and American Thought, 1820-1940, Manchester 1985.
- [57] W. Mager(Hg.), Geschichte der Stadt Spenge, Spenge 1984.
- [58] E. Maschke/J. Sydow(Hg.), Zur Geschichte der Industrialisierung in den süddeutschen Städten, Sigmaringen 1977.
- [59] H. Matzerath, Nationalsozialismus und kommunale Selbstverwaltung, Stuttgart 1970.
- [60] H. Matzerath, Städtewachstum und Eingemeindungen im 19. Jahrhundert, in: J. Reulecke(Hg.) [1978], S. 67-89.
- [61] H. Matzerath(Hg.), Städtewachstum und innerstädtische Strukturveränderungen. Probleme des Urbanisierungsprozesses im 19. und 20. Jahrhundert, Stuttgart 1984.
- [62] H. Matzerath, Urbanisierung in Preußen 1815-1914, Stuttgart 1985.
- [63] H. Matzerath, Lokalgeschichte, Stadtgeschichte, Historische Urbanisierungsforschung?, in: GG, Jg. 15, 1989[a], S. 62-88.
- [64] H. Matzerath, Stand und Leistung der modernen Stadtgeschichtsforschung, in: J. J. Hesse[1989][b], S. 23-49.
- [65] H. Matzerath/K. Ogura, Moderne Versädterung in Deutschland und Japan in: ZSSD, Bd. 2, 1975, S. 228-253.
- [66] L. Niethammer/F. Brügge, Wie wohnten die Arbeiter im Kaiserreich? in: AfS, Bd. 16, 1976, S. 61-134.
- [67] L. Niethammer(Hg.), Wohnen im Wandel. Beiträge zur Geschichte des Alltags in der bürgerlichen Gesellschaft, Wuppertal 1979.
- [68] L. Niethammer, Stadtgeschichte in einer urbanisierten Gesellschaft, in: W. Schieder und V. Sellin(Hg.), Sozialgeschichte in Deutschland, Bd. 2, Göttingen 1986, S. 113-136.
- [69] H. Pietsch, Militärregierung, Bürokratie und Sozialisierung. Zur Entwicklung des politischen Systems in den Städten des Ruhrgebiets 1945-1948, Duisburg 1978.
- [70] W. Rausch(Hg.), Die Städte Mitteleuropas im 19. Jahrhundert, Linz 1983.
- [71] W. Rausch(Hg.), Die Städte Mitteleuropas im 20. Jahrhundert, Linz 1984.

- [72] D.Rebentisch, Ludwig Landmann, Frankfurter Oberbürgermeister in der Weimarer Republik, Wiesbaden 1975[a].
- [73] D.Rebentisch, Raumordnung und Regionalplanung im Rhein-Main-Gebiet, in: Hessisches Jahrbuch für Landesgeschichte, Bd.25, 1975[b], S.307-339.
- [74] D.Rebentisch, Industrialisierung, Bevölkerungswachstum und Eingemeindungen. Das Beispiel Frankfurt am Main 1870-1914, in: J.Reulecke(Hg.) [1978], S.90-113.
- [75] J.Reulecke, Die wirtschaftliche Entwicklung der Stadt Barmen von 1910 bis 1925, Neustadt a.d. Aisch 1973.
- [76] J.Reulecke, Sozio-ökonomische Bedingungen und Folgen der Verstädterung in Deutschland, in: ZSSD, Jg.4, 1977.
- [77] J.Reulecke(Hg.), Die deutsche Stadt im Industriezeitalter, Wuppertal 1978.
- [78] J.Reulecke, Stadtgeschichtsschreibung zwischen Ideologie und Kommerz. Ein Überblick, in: Geschichtsdidaktik 7, 1982, S.1-18.
- [79] J.Reulecke, Geschichte der Urbanisierung in Deutschland, Frankfurt 1985.
- [80] J.Reulecke, Bundesrepublik Deutschland, in: C.Engeli/H.Matzerath(Hg.) [1989][a], S.21-36.
- [81] J.Reulecke, Verstädterung und Urbanisierung als Elemente soziokommunikativer Auseinandersetzungen im 19. Jahrhundert, in: H.H.Hesse[1989][b], S.51-67.
- [82] J.Reulecke, Fragestellungen und Methoden der Urbanisierungsgeschichtsforschung in Deutschland, in: F.Mayrhofer(Hg.)[1993][a], S.55-68.
- [83] J.Reulecke, Stadtgeschichte, Urbanisierungsgeschichte, Regionalgeschichte -- einige konzeptionelle Bemerkungen, in: H.-J.Priamus/R.Himmelmann (Hg.)[1993][b], S.13-25.
- [84] J.Reulecke/G.Huck, Urban History Research in Germany, in: Urban History Yearbook, 1981, S.39-54.
- [85] H.-G.Reuter, Stadtgeschichtsschreibung im Wandel, in: AfK, Jg.17, 1978, S.68-83.
- [86] W.Ribbe(Hg.), Geschichte Berlins, 2 Bde., München 1987.

- [87] J. Rodriguez-Lores/G. Fehl (Hg.), Stadtebaureform 1865-1900. Von Licht, Luft und Ordnung in der Stadt der Grunderzeit, 2 Teile, Hamburg 1985.
- [88] D. Saalfeld, Göttinger Miet- und Sozialverhältnisse im zweiten Drittel des 19. Jahrhunderts, in: H. Matzerath [1984], S. 124-147.
- [89] A. v. Saldern, Vom Einwohner zum Bürger. Zur Emanzipation der städtischen Unterschicht Göttingens 1890-1920, Berlin/München 1973.
- [90] B. Schröder/H. Stoob (Hg.), Bibliographie zur deutschen historischen Städteforschung, Teil 1, Köln 1986.
- [91] W. H. Schröder (Hg.), Moderne Stadtgeschichte, Stuttgart 1979.
- [92] K.-D. Schwarz, Weltkrieg und Revolution in Nürnberg, Stuttgart 1971.
- [93] H. Schwippe/C. Zeidler, Die Dimensionen der sozialräumlichen Differenzierung in Berlin und Hamburg im Industrialisierungsprozeß des 19. Jahrhunderts, in: H. Matzerath [1984], S. 197-260.
- [94] J. von Simson, Kanalisation und Städtehygiene im 19. Jahrhundert, Düsseldorf 1983.
- [95] H. Stoob (Hg.), Die Stadt. Gestalt und Wandel bis zum industriellen Zeitalter, 2. Aufl., Köln-Wien 1985.
- [96] J. Sydow (Hg.), Städtische Versorgung und Entsorgung im Wandel der Geschichte, Sigmaringen 1981.
- [97] H.-J. Teuteberg (Hg.), Urbanisierung im 19. und 20. Jahrhundert. Historische und geographische Aspekte, Köln 1983.
- [98] H.-J. Teuteberg (Hg.), Homo habitans. Zur Sozialgeschichte des ländlichen und städtischen Wohnens in der Neuzeit, Münster 1985.
- [99] H.-J. Teuteberg (Hg.), Stadtwachstum, Industrialisierung, sozialer Wandel. Beiträge zur Erforschung der Urbanisierung im 19. und 20. Jahrhundert, Berlin 1986.
- [100] H.-J. Teuteberg/C. Wischermann, Wohnalltag in Deutschland 1850-1914, Bilder-Daten-Dokumente, Münster 1985.
- [101] S. Thernstrom/R. Sennet (Hg.), Nineteenth-Century Cities. Essays in the New Urban History, New Haven/London 1969.
- [102] I. Thienel, Städtewachstum im Industrialisierungsprozeß des 19. Jahrhunderts, Das Berliner Beispiel, Berlin/New York 1973.

[103] R.Tilly, Wohnungsbauinvestitionen während der Urbanisierungsprozesses im Deutschen Reich 1870-1913, in: H.-J.Teuteberg(Hg.)[1986], S.61-99.

[104] R.Tilly/T.Wellenreuther, Bevölkerungswanderung und Wohnungsbauzyklen in deutschen Großstädten im 19. Jahrhundert, in: H.-J.Teuteberg(Hg.)[1985], S.273-300.

[105] G.Wiegelmann(Hg.), Kulturelle Stadt-Land-Beziehungen in der Neuzeit, Münster 1978.

[106] C.Wischermann, Wohnen in Hamburg vor dem Ersten Weltkrieg, Münster 1983.

[107] V.Wünderlich, Arbeiterbewegung und Selbstverwaltung. KPD und kommunalpolitik in der Weimarer Republik. Mit dem Beispiel Solingen, Wuppertal 1980.

[108] O.Ziebill, Politische Parteien und Kommunale Selbstverwaltung, Stuttgart 1972².

[109] H.Zwahr, Zur Konstituierung des Proletariats als Klasse. Strukturuntersuchung über das Leipziger Proletariat während der industriellen Revolution, Berlin(0) 1978.